



東北復興日記

まだまだ



特定非営利活動法人

ザ・ピープル理事長

吉田恵美子さん

▶▶ 237

ら助言をいただきました。「大切なのは現状の記録を残すこと。情報発信をすること。これらがいざれ必ず役に立ちます。そして、外から来た支援団体はいずれ出ていきます。その時地元に残るのはローカルの団体だけです」

この言葉を受け、デジタルカメラを手手に現場に立ち、震災通信を発信することにしました。そして、外部からの支援の波が引いていくのを見守りながら、被災者・避難者支援事業の中にとどまり続けてきました。

震災通信というタイトルが不釣り合いに感じるほど、震災体験は

「いわき震災通信」100号

からお付き合いのあった方や、震災後にご縁の生まれた方など約五百人に、二月月に一回程度送ってきました。

震災通信を書き始めたのは一年三月二十一日。震災直後の混乱の中、いわき市で放射能汚染のために老人や子供がバタバタ死んでいるという心無いデマがネット上に流れていました。その時期、原発事故の影響で街を後にせざるを得ない人が多かったのは事実です。しかし、歯を食いしばって復旧・復興のために動いている仲間たちがいたのも事実でした。

デマを払拭できないかと思っていた折、国際協力関係の専門家か

遠のきつつあります。日々、原発関連報道がある福島でもそうなのですから、県外では終わったものとされても不思議ではありません。だからこそ、今の福島を知ってもらうことが必要だと思えます。未来に向けて動きだした明るい面と、地域に残る課題の暗い面の双方を、いわき震災通信にはまだ役目が残っていると信じています。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。